

耐寒性・施工性にすぐれた 「黒いぶし一体瓦」の開発



生産の歩留まりが悪く、量産化が難しいとされる「黒いぶし瓦」(平成17年に淡路瓦工業組合が開発)を効率よく量産できる体制を目指す。さらに、「黒いぶし」で、丸瓦と平瓦を一体化した「黒いぶし一体瓦」を開発する。
開発した「黒いぶし一体瓦」で、増える海外需要や、一般的な淡路瓦が得意としない地域での需要獲得を目指す。

事業の背景



「黒いぶし一体瓦」の開発・量産化で、独自性を出す

淡路地域は日本の三大瓦産地の一つで、いぶし瓦の生産地として知られている。最近、今までにない黒くて美しい「黒いぶし瓦」が開発され、注目されている。その独特の黒い風合いが海外(特に台湾、中国)で評価され、近年は引き合いが増えている。当社においても、時々大手瓦メーカーから「黒いぶし瓦」の製造協力依頼がある。しかし、「黒いぶし

瓦」の量産は難しく、当社を含め「黒いぶし瓦」の量産対応ができる近隣の同業者は極めて少ない。そこで、当社が他社に先駆けて「黒いぶし瓦」の量産化体制を整え、さらに「黒いぶし一体瓦」を開発することで、自社の独自性を出したいと考えるに至った。

事業の内容



「黒いぶし一体瓦」の開発・量産化

焼成窯の導入や生産工程の見直しによって「黒いぶし瓦」の歩留まりを改善した。さらに改善する必要はあるが、一定の成果を得たことで、「黒いぶし瓦」量産が可能になった。これによって、大手瓦メーカーからの「黒いぶし瓦」の製造協力に対応できる体制が整った。

①焼成窯の導入 「黒いぶし瓦」は、従来のいぶし工程よりも高温の焼成と酸化処理することで、今までにない黒さと美しさを出している。従来のいぶし瓦以上の高温(1,000度以上)で焼成する必要があるが、当社が有する焼成窯では、「黒いぶし瓦」の生産に必要な高温が出せない。そこで、本補助金を活用して「黒いぶし瓦」の生産に必要な高温が出

せる強制循環式ガス焼成窯を導入した。

②「黒いぶし瓦」の歩留まり改善 歩留まりの改善に向けて、瓦づくりの各工程を見直した。試行錯誤のうえ、「黒いぶし瓦」の量産に最適な生産方法を発見した。具体的には、土の粒の大きさ、水分量、磨き工程※を見直した。

※磨き工程は、焼成の前に、プレス機で生成された瓦の表面をヘラ等で丹念に磨いて滑らかにする作業である。「黒いぶし瓦」には、いぶし瓦以上にゆがみの少ない状態にすることが求められる。

事業取り組みの成果



「黒いぶし一体瓦」の開発

近隣の同業者の多くは、丸瓦と平瓦を別々に生産する。しかし、当社では丸瓦と平瓦を一体化した「一体瓦」を生産できる。一体化することで、本葺瓦のデザインのまま、屋根の軽量化や施工の簡略化が実現でき、施工業者から支持されている。「一体瓦」を生産できることが、当社の強みとなっている。
「一体瓦」を生産できる強みに加え、焼成窯の導入、生産工程の見直しによって「黒いぶし瓦」の歩留まりを改善した成果を得て、「黒いぶし一体瓦」を開発した。



【黒いぶし一体瓦】

最新設備の導入で生産性向上

従来の焼成窯では、熟練技術者が適宜瓦の焼け具合を観察し、微妙に火加減を調節していた。そのため、焼成時間は一定でなく、焼成完了までの時間が読めなかった(焼成窯から取り出すタイミングは、熟練技術者の経験と勤による)。
熟練技術者の育成に長期間を要するなか、最新設備(焼成窯)を導入したことで、熟練技術者でなくても適切な焼成ができる体制が整った。事業承継も見すえ、少数の熟練技術者でも生産性を向上させる体制が徐々にできつつある。



【補助金で導入した焼成窯】



【焼成前の瓦】



今後の展開

- 円滑な事業承継の実現
- 海外需要の獲得
- 一般的な淡路瓦が得意としない地域での需要獲得

平川瓦工業

所在地	兵庫県南あわじ市津井2031	E - m a i l	heian@river.sunnet.ne.jp
T E L	0799-38-0046	H P	http://heiankawara.com
設立	昭和12年1月1日	事業内容	社寺・文化財・一般住宅用瓦製造・販売
代表者	代表 平川 和久	主要生産設備	焼成窯2式、プレス機、土練器
従業員数	4人(令和元年6月現在)		
資本金	――		



代表 平川 和久氏

時代に合わせた瓦を提供できるメーカーを目指す

瓦文化はおよそ1400年前、飛鳥・天平時代に百済より伝えられたと言われています。瓦は、悠久の時の流れの中で風雪に耐え、建築物を守り通してきました。その中でも本葺瓦の意匠の特長である平瓦と丸瓦の組み合わせが演出する重厚さは、「古代の知と技」の結晶です。
伝統を守りながらも、工期短縮や瓦葺き職人の作業負担の軽減を図った瓦、いわば時代に合わせた瓦を提供できる瓦メーカーを目指しています。